

ゆっくりゆったり子育て
～子育ては親も子どもも同じ年 だから子育ては親育ち～

子育て伴走「そげだがあ」通信 No. 5 ～みんな大切 笑顔あふれる家庭と保育園に～



R 4 . 1 0 . 1 3 やすぎ保育園園長 福島朗博

◆ 10月の園風景から うんどう会にちなんで ～運動の秋 からだとこころはセットです 運動を心から楽しんで～

この秋の園の行事として、近隣の十神小学校の広い体育館をお借りしてのうんどう会は、今年度もコロナ禍のためにつき組とそら組だけとなりますが、いよいよ週末にせまってきました。ほし組は先週のところで、園内の遊戯室で、かけっこや追いかかけっこ玉入れ、巧技台などの障害物をかけ巡る競技をしました。にじ組も来週に「にじぐみランド」と銘打って素材にふれる遊びも入れた楽しい運動遊びを行います。こんな様子で、毎日子どもたちは園庭や遊戯室などでうんどう会の練習に励んだり、園庭での遊びでも競技種目の自主練！？を思わせる運動を友だちと一緒にしたりして楽しんでいるようです。

大きな行事が終わると、子どもたちは見違えるかのようにぐんと大きく成長します。それは、『がんばった自分』を、家族や先生、友だちに「がんばったね～！」と褒めて認めてもらって、「やりきったよ！」という充足感が自信となって一段とたくましくさせてくれるのでしょう。当日は子どもたちみんなへの応援と大きな称賛をどうぞよろしくお願いします。

2・3歳児のこころ♡♡「がんばりたいけどがんばれない」



○幼稚園教育実習でのほろ苦い思い出～「だって わたしはしるのおそいから」～

私が大学時代に、ある幼稚園で3歳児クラスの教育実習を体験したときのエピソードです。折しもうんどう会がせまっており、クラスでかけっこの練習がありました。「よーい、ドン！」みんな一斉にかけだしたはずなのに、その後ろをとぼとぼと歩いている女の子がいました。「あれ？ どうして走らないの？」

その子はうつむいたまま答えませんでした。しつこいかなと思いつつも意外な思いが優先して繰り返し聞きました。少し待ってようやく返ってきた答えは、ショッキングな言葉でした。

「だって、わたしはしるのおそいから。」

「まだこんなに幼い子どもにも、もうそんな苦手意識が芽生えてくるものなのか。」。自問自答を繰り返して結局、実習中にはその子に何もできなかった、ほろ苦い思いが残りました。実習が終わって考えたことは、子どもたちには純粋に走る喜びや楽しさを伝えていきたいということでした。速く走れなくなったらかまわない、また走るのが心から好きになったら、少々苦しみにもめげずに立ち向かっていけると思います。当時、陸上部であった私は（私自身は予選ボーイで全然速くないので、念のため）、ほとんど全員が教員を目指していた部員たちに、その実習中の体験を伝え、「走る楽しさをどうか伝えて、私たちは走るのが嫌いな子どもをつくらないようにしようね。」と話しました。あの女の子は今もう40過ぎたいい大人になっているはず、ジムにでも通って運動して走っていたら最高に嬉しいなあと思います。

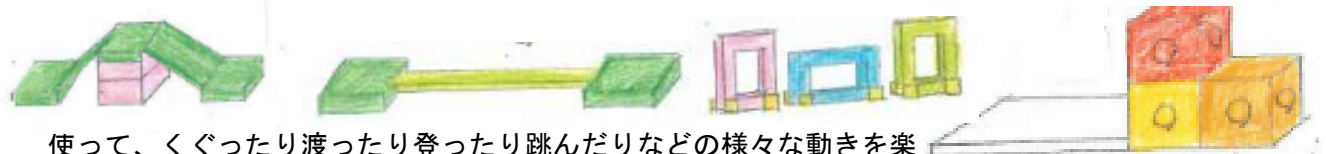
○ほし組2歳グループのうんどう会の一コマから ～「いつもは一人で跳べるんですよ」～

先週は、ほし組の子どもたちのうんどう会を園の遊戯室で行いました。次のエピソードは、そのときの2歳児グループの様子と担任保育士から聞いた話です。

『くじらチームのだいぼうけん』と銘打って、遊戯室に円を描くように並べられた障害物を

園長だよりバックナンバー
こちらです →





使って、くぐったり渡ったり登ったり跳んだりなどの様々な動きを楽しむ競技で、子どもたちはペアになって自分のペースで一周します。みんな元気に張り切って取り組み、友だちにも「がんばれ～！」と声援を送っていました。

りえちゃん（仮名）も名前を呼ばれてペアの友だちとスタートしました。でも、りえちゃんの足どりは重く、両手を口につけて硬い表情です。先生は横から声をかけて励ましながら、それまでの練習では、やる気満々の表情で活発に動いていたのに、と思いました。先生は気づきました。本番では練習場面と打って変わり、記念写真撮りを依頼した外部カメラマンはじめ、園用カメラやビデオカメラを手にした複数の先生（園長も…）が所々で待ち構え、それがプレッシャーを与えて萎縮しているのかもしれない……。子どもの背の高さ分くらいあるゲームボックス台（*右端上図）の上まで誘導しましたが、いよいよ硬くなって立ち動かなくなりました。先生は台の横で見守って一人で跳び降りるのを待ち、また片手や両手でつかないだりしてしばらく促していましたが、最後は先生に抱きかかえられるようにして台から降りました。

うんどう会が終わった後で、先生が報告してくれました。（以下『 』内は先生の言葉です）

『実は、あの台の上で、りえちゃんを促すために手を伸ばして握ったときに払いのけられたんです。それまで手を引いてもらってどうにか競技を進めてきたりえちゃんが、どうして手を払いのけるのか。恥ずかしいのかな、いやなのかな、と今どんな気持ちなのか考えました。ペアの友だちは先に一人で跳びのけて会場から大きな拍手をもらっている最中でした。いつもクラスのお姉さんの存在のりえちゃん、「わたしだってできるのに、いまはどうしてもできないのだわ……。』という思いで葛藤しているように感じました。そこで、私は「いつもは一人で跳んでいるんですよー！」と会場に聞こえるように大きな声で知らせました。すると、納得したのか、安心したようにりえちゃんの体がふっと軽くなり、抱っこで台から降りました。終わった後で、「たのしかった！せんせいといっしょにやったがぁ。」と嬉しそうに話してくれたりえちゃんを見て、あの台の上でのりえちゃんの気持ちに向き合うことができて本当によかったと感じました。』（以上、担任保育士の言葉）

あのとき、りえちゃんは先生に『抱きかかえられるようにして降りた』ように映ったのですが、そうではなくて、りえちゃんの意味で先生に体を預けるようにして一緒に跳び降りたのです。上記のエピソードで挙げた、2、3歳児は、「できたかーできないか」が自分でもわかり、その評価に過敏になって相手の目や表情が気になってきます。その中で「できなかった」事実が積み重なって苦手意識を抱いたり、「**がんばりたいけどがんばれない**」葛藤が生まれたりします。大きい自分を求めてやまない心が高まり、そうならない自分との間で、悩み、葛藤するのです。そうしたときに、子どもに寄り添い「**よりよい自分**」「**そうなりたい自分**」が潜む気持ちをとらえて、心のなかの前向きな葛藤をことばにして「本当はできたんだよね」「くやしかったけど、さいごはがんばったね」などと認めてもらおうと、子どもは救われた気持ちになります。そうやって、大人の言葉による支えで「**よりよい自分**」をもう一度選びとり、自分のなかで「**終わりよし**」とすることで、子どもは**大きい自分**に向かって成長していくのです。

*引用参考「発達の扉」白石正久著（かもがわ出版）

保護者の皆様にお配りしている『やすぎ保育園 入園のしおり』にある【人権目標】には、『自尊感情を育み、自分が大切、友だちも大切な心を育てる。～その時々**にゆれる子どもの心**があることに気づく～』とし、『保育者は、子どもたち一人ひとりに、時々**ゆれ動く心**があり、素直なまなざしをもち、心の中に**わかってほしいと祈るような思い**のあることに気づく。』と記しています。私たちは保育を通して、いま一度この一文をかみしめていきたいと思います。

園長の

ことば・子育て相談会 次回は10月22日（土）に行います
ご希望の方は平日でもお受けしますので、遠慮なくご連絡ください